



長久手市文化の家
NAGAKUTE Cultural Center

パトリツィア・ コパチンスカヤ

ヴァイオリン・リサイタル

with
ヨーナス・アホネン

名演への招待
シリーズ20

©Yiannis Soulis for Ouassis Stegi

©Lukas Fier

Patricia Kopatchinskaja Violin Recital with Joonas Ahonen

2023年3月14日(火) 19:00開演 / 18:30開場

長久手市文化の家 森のホール

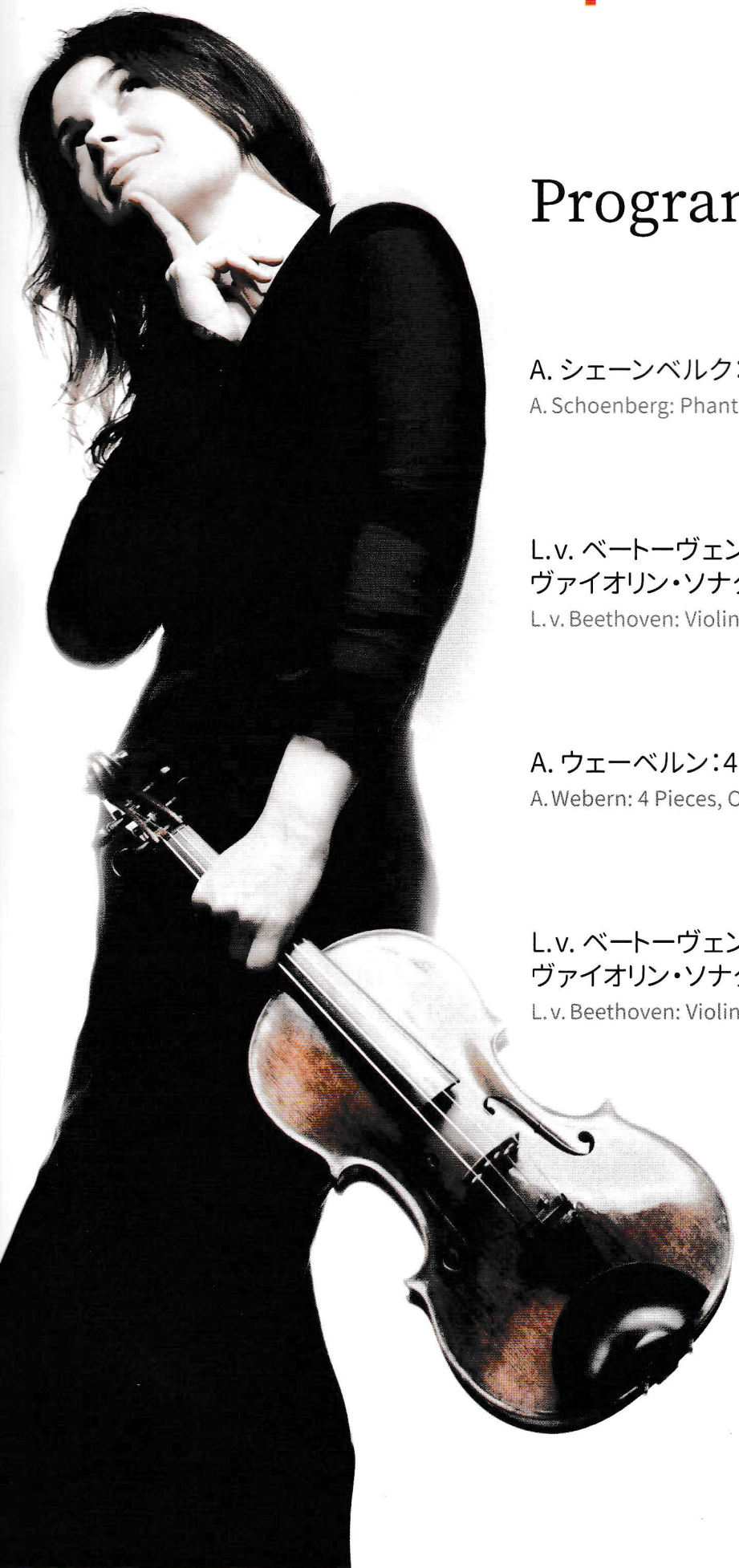
主催 長久手市

助成 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) 独立行政法人日本芸術文化振興会



デザイン 田中尚葉

Patricia Kopatchinskaja



Program

A. シェーンベルク: 幻想曲 作品47

A. Schoenberg: Phantasy, Op.47

L.v. ベートーヴェン:

ヴァイオリン・ソナタ第7番 ハ短調 作品30-2

L.v. Beethoven: Violin Sonata No.7 in C minor, Op.30-2

A. ウェーベルン: 4つの小品 作品7

A. Webern: 4 Pieces, Op.7

L.v. ベートーヴェン:

ヴァイオリン・ソナタ第9番 イ長調 作品47〈クロイツェル〉

L.v. Beethoven: Violin Sonata No.9 in A major, Op.47 "Kreutzer"

Violin Recital with Joonas Ahonen

今、コパチンスカヤを聴く

パトリツィア・コパチンスカヤは、ここ15年ほど一部のファンの間で度々話題になってきた。しかし、彼女の名がこれほどまでに広まったのは、やはりテオドール・クルレンツィス率いるムジカ・エテルナとともに演奏した、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲の影響であろう。2019年の来日公演は全国のクラシックファンから注目を集めた。幾度となく演奏されてきた名曲でありながら、これまでにない衝撃的な演奏は聴衆を驚愕させた。驚きを通り越して笑いが止まらないほどである。

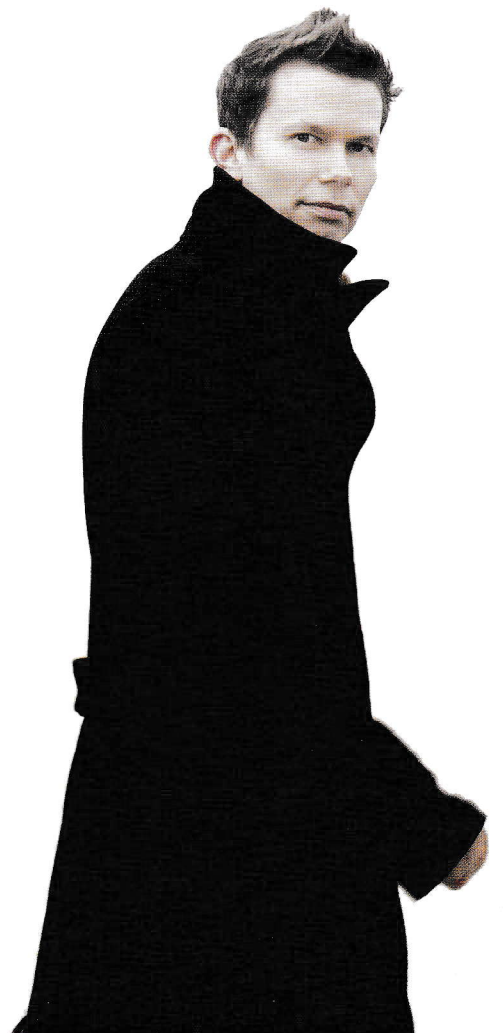
楽譜にない音や楽器を追加した録音、前衛的なまでに誇張された演奏は、人によっては許しがたいことのように捉える人もいよう。作曲家の意図を無視した演奏だと思う人もいかもしれない。19世紀後半から発展した実証主義的な科学アプローチは音楽にも影響を与え、クラシック音楽は「作曲家を最大限に尊重し、楽譜と資料に基づく厳格な音楽」になった。これまでクラシック音楽界で志向されてきたのは、「エビデンスに基づく音楽」なのだ。もちろんその姿勢はこれからも維持されるだろうし、されるべきであろう。しかし、エビデンスを重視するあまり、演奏家はいつしか作品の再生機になってしまった。もともと演奏家はそれぞれの解釈をもとに演奏し、時には作品に手を加えることもあった。演奏家にも作品を自由に解釈する権利があったのである。演奏家が作曲家の意図から外れる（と思わせる）ことを許さない姿勢は、すべてを枠に当てはめてルール化しようとする今の社会の閉塞感に、どこか通じるものを感じる。

コパチンスカヤの演奏が魅せるものは何か？ コパチンスカヤにとって、クラシック音楽は「空虚な美しさの中に収まりかえった、お上品な人々の興味を掻き立てるためのもの」ではなかった。作曲家に“忖度した”従来のクラシック音楽は、彼女にとってはつまらないフィクションでしかない。上品に装った、表層的な音楽。そこに生きている人間のリアリティはない。

彼女は決して奇抜さによって聴衆の目を引こうとしているわけではない。それは、最近ファジル・サイとともにリリースしたアルバムに収められているブラームスのヴァイオリン・ソナタ第3番を聴けば、自明のことであろう（気高さと生命力にあふれた素晴らしい演奏であり、まだ聴いていない方はリサイタルが終わったらぜひ聴いてほしい！）。彼女が表現しようとしているのは、作曲家が表現しようとしたものの本質的な部分であり、彼女は作品に合わせて最適な方法でそれを表現しているだけなのだ。

コパチンスカヤの演奏によって、演奏家は自由に表現する権利を取り戻そうとしている。彼女の演奏を大きく捉えれば、様々なものが本質を見失い、形骸化している今日の社会に対するメッセージのようにも思える。彼女の演奏からは新しい時代の進むべき道を指し示す希望が見えるのだ。

文・曲目解説：山本宗由(音楽学)



Program Note

A. シェーンベルク: 幻想曲 作品47

A. Schoenberg: Phantasy, Op.47

「十二音技法」の考案で有名なアルノルト・シェーンベルク（1874-1951）は、本日一緒に演奏されるルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）と同じく、新しい時代の流れを作った作曲家だった。十二音技法は、1 オクターブ中の 12 音を並べた音列により作曲をする技法である。それまでの調性音楽から離れた、20 世紀の新しい音楽の可能性を導き出した。

シェーンベルクは生涯をかけて音列による作曲の可能性を模索した。〈幻想曲〉は 1949 年に作曲されたシェーンベルク最後の器楽曲であり、シェーンベルクの作曲家人生が集約された作品である。正式には「ヴァイオリンのためのピアノ伴奏付き幻想曲」と題され、ヴァイオリンを主役として展開される。シェーンベルクは、まずヴァイオリンのパートを単独で作曲し、それに合わせてピアノのパートを作曲した。

この作品の基本音列は下の譜例のとおりだが、前半・後半の 6 音ずつのヘクサコードにより作曲されている。音列の特徴として、ト調を基本とした調性的な響きを部分的に感じることができる。シェーンベルクはしばしば無調の作曲家と呼ばれるが、彼自身は常に調性を意識していた。シェーンベルクにとって調性とは、音と音との関係性から生まれるより広い概念だった。従来の調性的な響きと、これまでの調性とは異なるものを融合させることで、シェーンベルクは新しい調性を作り出そうとしていた。

約 10 分ほどのそれほど長くない作品だが、全体は大きく 4 つの部に分かれている。Grave で重々しく始まる主部、激しい推移部からの緩徐部、スケルツォ、そして再現部となっている。シェーンベルクに特有の、単一楽章を多部分で構築する手法をとっており、擬似的な 4 楽章構成とみることできる。複雑な音列の組み合わせと凝縮された形式、そしてヴァイオリンの様々な奏法から生み出される多彩な音響—まさにシェーンベルクの探究の終着点とも言える円熟した作品である。



L.v. ベートーヴェン： ヴァイオリン・ソナタ第7番 八短調 作品30-2

L.v. Beethoven: Violin Sonata No.7 in C minor, Op.30-2

ベートーヴェンが作曲したヴァイオリン・ソナタは 10 曲あるが、そのほとんどは 1797 年から 1803 年の間の短期間で書かれている。古典派時代のヴァイオリン・ソナタは、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）の作品に代表されるような“ヴァイオリンのオブリガート付きピアノ・ソナタ”であり、主役はあくまでピアノだった（シェーンベルクの〈幻想曲〉とは反対の構図）。ベートーヴェンも初期のヴァイオリン・ソナタはモーツァルトのスタイルを踏襲している。しかし、短い間に次々とソナタを書き上げたベートーヴェンは、ヴァイオリンの立場をピアノと対等な関係に引き上げた。

この第 7 番は、ロシア皇帝アレクサンドル 1 世に捧げられた 3 曲（作品 30、第 6 番～第 8 番）の一つであり、3 曲中唯一の短調で書かれている。注目すべきは八短調で書かれていることだ。八短調は、例えば交響曲第 5 番「運命」などにも使われており、ベートーヴェンにとって特別な意味を持つ調である。また、4 楽章制をとっていることも他のソナタと異なる。緩徐楽章とスケルツォをもち、交響曲に近い形式で書かれている。第 9 番〈クロイツェル〉と並ぶ傑作と評価されており、いずれの楽章も音楽的に充実した内容をもっている。

- 第 1 楽章 Allegro con brio
- 第 2 楽章 Adagio cantabile
- 第 3 楽章 Scherzo: Allegro
- 第 4 楽章 Finale: Allegro - Presto

A. ウェーベルン:4つの小品 作品7

A. Webern: 4 Pieces, Op.7

アントン・ウェーベルン（1883-1945）は、シェーンベルクとともに新ウィーン楽派として、20世紀の新しい音楽を開拓した作曲家である。決して多くの作品を残してはおらず、作品番号は31までしか付けられていない。もともとウェーベルンはウィーン大学で音楽学の勉強をしながら、後期ロマン派的な作風で作曲をしていた。ウェーベルンの最初期の作品は耳あたりがよく、現代音楽に抵抗のある聴衆からは一定の人気を得ているが、あくまで音楽史に名を刻むほどの傑出した作曲家ではなかった。しかし、ウェーベルンを20世紀を代表する作曲家に変えたのがシェーンベルクとの出会いだった。ウェーベルンもまた、シェーンベルクとともに新しい音楽を模索していった。

〈4つの小品〉が書かれたのは1910年、ウェーベルンが26歳の時の作品だ。ウェーベルンがシェーンベルクのレッスンを受けていたのは1908年までであり、作曲家として立ち上がった頃の作品ということになる。この頃のウェーベルンは複数の小品から成る曲集を続けて出しているが、ウェーベルンの作風の特徴としてよく挙げられるのが、ミニアチュール（細密画）様式とも呼ばれる極小の小節数に凝縮された楽曲の構成方法である。〈4つの小品〉の4曲の小節数は、それぞれ9小節、24小節、14小節、15小節となっており、全曲の演奏時間も5分ほどしかない。各曲は動的なエネルギーと静的なエネルギーが強いコントラストをもって書かれている。究極なまでに短く削ぎ落とした曲のなかには、ヴァイオリンの多様な奏法が詰め込まれ、豊かな音響を聴くことができる。

第1曲 Sehr langsam（非常にゆっくりと）

第2曲 Rasch（速く）

第3曲 Sehr langsam（非常にゆっくりと）

第4曲 Bewegt（動きをもって）

L.v. ベートーヴェン:

ヴァイオリン・ソナタ第9番 イ長調 作品47〈クロイツェル〉

L.v. Beethoven: Violin Sonata No.9 in A major, Op.47 "Kreutzer"

この世に数あるヴァイオリン・ソナタの中において、金字塔として君臨し続けている名曲である。ヴァイオリンの名手ロドルフ・クロイツェル（1766-1831）に献呈されたことから、「クロイツェル・ソナタ」の名前で知られている。ベートーヴェンが目指した、ピアノとヴァイオリンの対等な関係が実現しており、原題は「ほとんど協奏曲のように、極めて協奏曲風に書かれた、ヴァイオリンオブリガート付きのピアノ・ソナタ」となっている。

楽曲の内容も非常に充実しており、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタの中でも大規模な作品である。約10年後に書かれた第10番（1812年作曲）を除いて、ベートーヴェンはその後に続くヴァイオリン・ソナタを書かなかったが、それはクロイツェル・ソナタですべてやり尽くしたからとも言われている。ヴァイオリンの独奏で始められる序奏の冒頭から、荘厳さと気高さにあふれており、モーツァルトの時代にみられたサロン音楽的な性格を完全に払拭している。まさにヴァイオリン・ソナタの新しい地平を切り開いた一曲である。

第1楽章 Adagio sostenuto - Presto

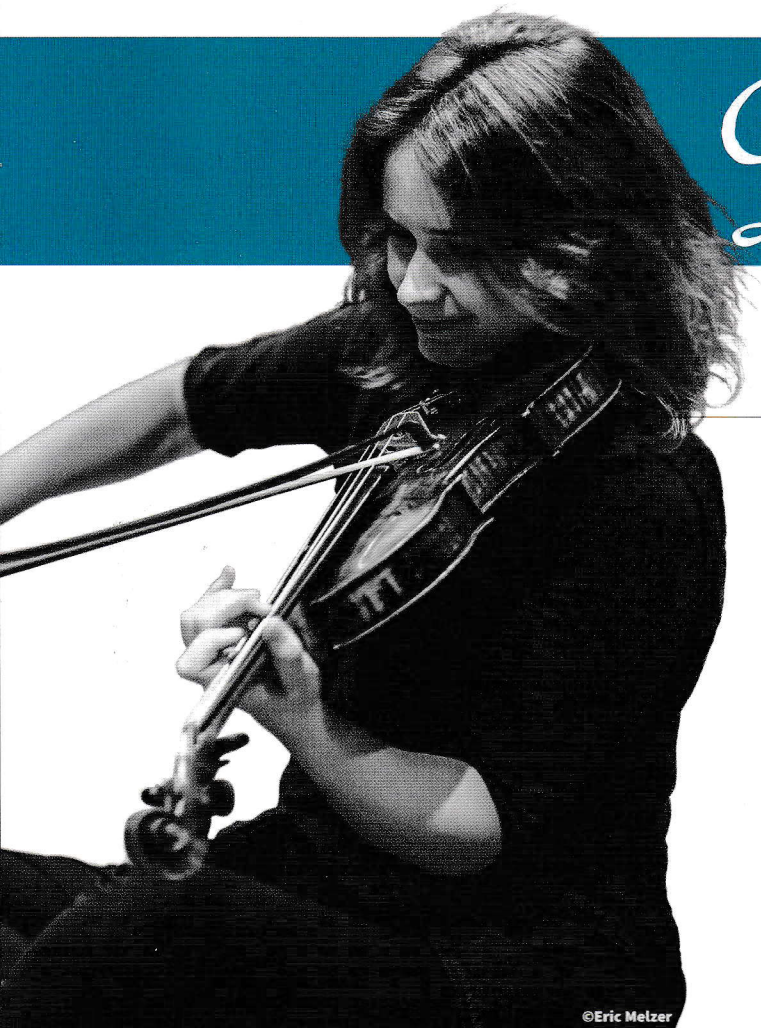
第2楽章 Andante con variazioni

第3楽章 Finale: Presto





Profile



©Eric Metzner

パトリツィア・コパチンスカヤ (Vn) Patricia KOPATCHINSKAJA

モルドヴァ生まれ。作曲とヴァイオリンをウィーンとベルンで学ぶ。2000年シェリング国際コンクール優勝、02年「クレディ・スイス・グループ・ヤング・アーティスト賞」ほか受賞多数。

世界各地の音楽祭からも数多く招かれ、ルツェルン、ザルツブルク、ウィーン芸術週間、ロッケンハウスなどに出演。コパチンスカヤが音楽監督を務めた18年のアメリカのオーハイ音楽祭では、ルツェルンでの世界初演に続き、自身が構成したコンセプチュアルなステージ・プログラム《ディエス・イラエ》を上演し、好評を博した。

録音としては、14年よりアーティストリック・パートナーを務めるセントポール室内管弦楽団との共演による「死と乙女」で18年のグラミー賞を受賞したほか、ボリーナ・レシェンコと録音した最新盤「Deuxヴァイオリンとピアノのための作品集」も高く評価されている。

使用楽器は、英国の『The Strad』誌で「色鮮やかな音色を持つ楽器。そのヴィオラのような性質は彼女の演奏に格別な喜びを添えている」と評された、1834年製ブレッセンダ。

ヨーナス・アホネン (Pf) Joonas AHONEN

フォルテピアノによる18世紀後期作品の演奏から、現代作品の世界初演まで幅広い音楽的関心を持ち、現代曲の代表的な演奏団体のひとつでもあるクラングフォルム・ウィーンや、ピリオド楽器を用いて古典派やロマン派の作品を演奏するロードベリ三重奏団のメンバーとして活躍。

テオドル・クルレンツイスが主宰するディアギレフ・フェスティバルでは、リサイタルのほかに、フィリップ・マインツのピアノ協奏曲を演奏した。パトリツィア・コパチンスカヤとは、ロッケンハウス音楽祭やウィーン・コンツェルトハウス、ミラノ・スカラ座などで演奏を行っている。

数多くの録音を行っており、BIT20とのリゲティのピアノ協奏曲や、アイヴズのピアノ・ソナタを収録した2枚組などが発売されている。



©Nikita Chuntomov

ヨーナス・アホネン 公開マスタークラス

日時：2023年3月15日(水) 13:00~16:30 (予定)

会場：長久手市文化の家 森のホール

受講生：木戸研匠(愛知教育大学1年) 受講曲/S. プロコフィエフ：ピアノ・ソナタ第3番

関口詩織(愛知県立芸術大学大学院2年) 受講曲/I. ストラヴィンスキー：ピアノ・ソナタ

聴講料：1,000円 ※事前申込不要、直接会場へお越しください。

コリン・カーリー・グループ オール・ライヴ・プログラム

日時：2023年4月26日(水) 開場18:30 開演19:00

会場：長久手市文化の家 森のホール

料金：前売 フレンズ会員：4,500円(前売のみ)

一般：5,000円 / 学生：3,000円

当日 一般：5,500円 / 学生：3,300円

取り扱い：長久手市文化の家 ※全席指定・未就学児入場不可